



たてやま

おらがんまつち

南総祭礼研究会

2013.03 No.14



館山市豊房地区

大戸



白幡神社境内からの風景

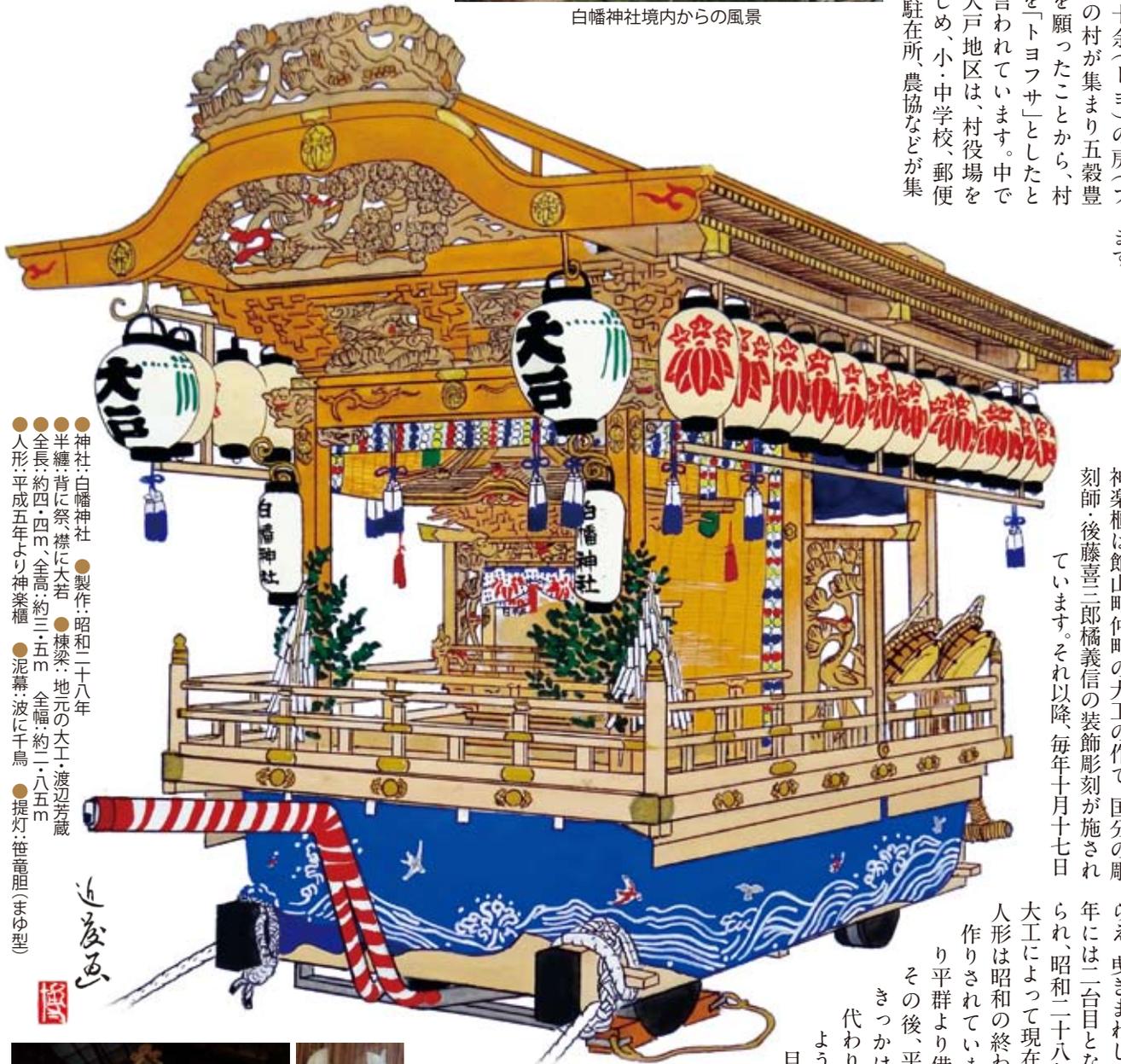
地域の紹介

館山市の面積の約四分の一を占める豊房地区は多くの谷から成り、その谷の出口に開けた五十戸ほどの小さな集落が大戸地区です。縄文遺跡や古代祭祀遺跡もある古い地域で、平安時代にあった安房国太田郷の地名「太田」が「大戸」と転化したという説もあります。

江戸時代には南条村の枝村でしたが、明治八年に大戸村として分離独立しました。その後明治二十二年に大戸村を含む十二か村が合併し豊房村が成立、十余(トヨ)の房(フサ)の村が集まり五穀豊穰を願ったことから、村名を「トヨフサ」としたとも言われています。中でも大戸地区は、村役場をはじめ、小・中学校、郵便局、駐在所、農協などが集

自慢の屋台・神楽櫃

当地区の祭礼は、明治十九年(一八八六)に白幡神社本殿造営を記念し、若衆によって初めて神楽が奉納されたことから始まります。神楽櫃は館山町仲町の大工の作で、国分の彫刻師・後藤喜三郎橘義信の装飾彫刻が施されています。それ以降、毎年十月十七日



- 神社：白幡神社 ● 製作：昭和二十八年
- 半纏：背に祭襟に大若 ● 棟梁：地元の大工・渡辺芳蔵
- 全長約四・四m、全高約三・五m、全幅約二・八五m
- 人形：平成五年より神楽櫃 ● 泥幕：波に千鳥 ● 提灯：笹童胆(まゆ型)

近後五

の祭礼には村民繁栄・五穀豊穰を願い、各戸をめぐる神楽が奉納されてきました。しかし、継承者が少なくなり大正十年を最後に中止され、昭和十二年、地区の若衆の発起により、地車(大八車)に武者人形などをしつらえ、曳きまわしが始まりました。昭和十五年には二台目となる組み立て式の屋台が作られ、昭和二十八年、区民の寄進により地元大工によって現在の屋台が完成しています。

人形は昭和の終わりまでは若衆によって手作りされましたが、若衆の減少により平群より借りるようになりました。

その後、平成四年の神楽櫃修復をきっかけに、平成五年より人形の代わりに神楽櫃を屋台に乗せるようになりました。なお、二台目の組み立て式屋台は長須賀地区へ貸したこともあり、その際、両地区の若衆の間で太鼓を通じて交流があったと伝えられています。



修復後屋台に乗る神楽櫃



後藤喜三郎橘義信による神楽櫃の彫刻